女房花
五尾一
石書堂
初摩之
初森下

曲亭作

一陽斎画

甘泉堂板

へ13
3729
1

女郎誓五名石臺初編
由亭馬琴作
一陽斎豊國画
彫仕 丁志春
上帙 上
上帙 下

門 へ13
3729

在昔楚國の干將と云ふ鍛冶あり。其妻を嫫耶と云ふ。時に楚王の妃彼身肥ゆる故に百合の暑に堪ざるを夜鐵の柱と抱て快と思ふ程に遂に孕て鉄丸を生む楚王其鐵を以て干將嫫耶に劍二口を作らしむ。その陰陽の二劍を干將嫫耶と名つけたり。干將その一劍を秘して生さぬ王是を知て怒て干將を殺す。嫫耶を殺さんとす。干將の子の名を赤と云ふ。眉間の廣さ一尺ありければ時の人綽號して眉間尺と呼做したり。王亦是を知て赤を殺さんと欲す。事甚急なり。赤彼劍を抱て逃て山中に在り。親の仇を報ぐ事を悲みて且歎き且泣て其時客あり赤に告て道汝その劍を以て汝の首と吾に授ぐ。吾汝の為に楚王を殺して怨を復さんとす。赤歎びて曰ク劍けり。然れども其の死骸倒れざる客則その死骸に向て吾汝が叛逆を拉言ひしが即倒れぬ。客その劍と赤が首を齎して楚王に報て実検を請へ。王赤が首を見んに猶生るが如し。客亦王に鑊を煮さしむ。既に煮ること五日三夜に至て其その首爛れざ王訝りて釜の辺を窺ひ見るに客の首と赤が首と相ともに躍り上りて互に噛合て相離れず。客の背に

在り劍を拔て王を刺す。王の首釜中に落て死して戰ふ者に似たり。客是を見て赤が首を刎て二頭釜中に投ぜ。煙亡ぶと云ふ。言は瑯琊代醉篇に見えたり。実を伍子胥の責に由て作設る當初の小説なり。その王が所云眉間尺巴の敎の權輿是なり。搜神記巻の三に載れども。そは畧文なり。然るを太平記大塔宮土代の段に右の全文を引用らるれば世の人今を古く知るべし。五色石件の事を本編に撮合て胎を奪ひ骨を換て。一種の主稿とす。唐山の公子小說五色石の書名を借て女郎花五色石墓と命るよりて章句の櫻者石火明の醋貝堅の處に柔きを細工に流て結局看び諸君子作者の用意を知らば五六集續出まで長物語の紙數とげ曳初る春霞四方の長視たのしてを代書の筆をかりてあらぬ童蒙心に居まそに老似げるも弱らーう序も。

弘化三年閏月下浣代書稿成
四年丁未正月吉日發行

曲亭馬琴識

鎌倉管領
足利
持氏

湯上関次
猛列

女時致
遅鷲

万人
額荷九儀七

われ面よきらめく
大力の
魚
うろこ
鱗の
蛍
蛍
蛍
玉ちり
鈴風
三條の
後鍛冶
宗次
女房
乙姫

恋わりの
君ふあるを夜い
こ味線の
いとあやつり
ものびゆで
さまれ
翠竹亭
枯野の尾花
片名屋
般七

面影のかつらぐ
年をふる
雛を
桐乃
こと
夜の
ふすま
むらん

雛屋妙作

山道高彦舊詠

千曳の
重石

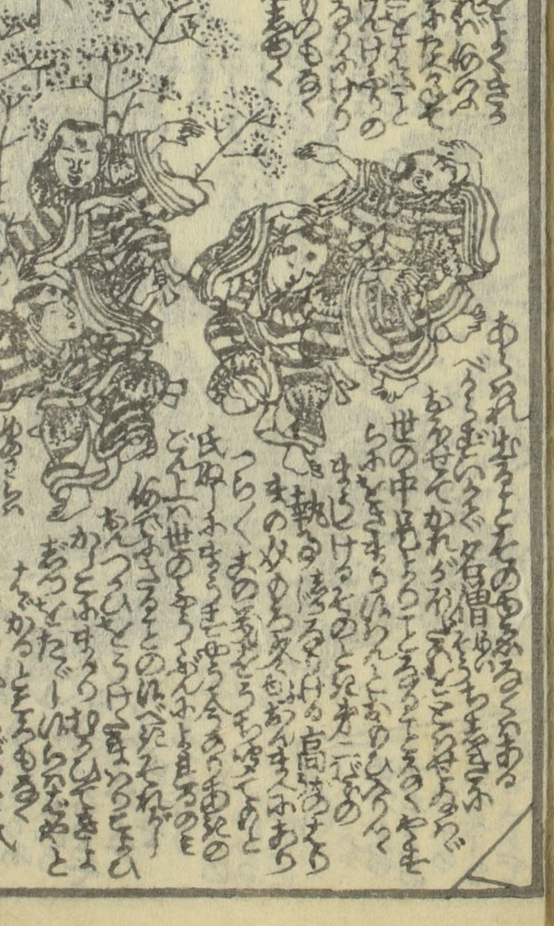
誠あきば
彩られも
ちるぞ
ちるぞ乃
頭
紳八宿
九九老人
無疆
雛屋の忠僕
木偶藏
手嵐
兄方太
重當
火の用心

みんぶのなか害願のことの日とまろを
たづねとて月
十六日のゆふべ
ようちかく
小ちえのこかのあれ
まうでふかとつけてかの月もこもふ
あのびゝうふ義烈ふをもれて
ゆう姫五ちえれつるのかとうふつや
あつさとのふるとまちけるる
わらう秋のさび
めるまべかの
五のとのとこころべーそのをれ五ちえふ
さいこけることれまらまれるるえべる
ちてゆゝーいちろうえ人いとめがしき
かをうるうふちろーの石さと五ちきゆそ五
栗さのゆをこことるうれなちうの角のもゝて
ぶるまでふ且かゝど且あゆこそてわさゆえて
ありけるかどその夜もまぞふ五こころ
白まるてらも月うけふたあと
つけくるるちくふ。これれべいと
あやまむべーかめどこころべーの
みとうようーのところ五六えるる
五ちうのゆゝとゆちちゆんとあらられゆそ
かここふさゆたうるつたてのうとるえぞく
うるつふれてまとうちうこうくだとどうけう
今とのあゝにあるまちふゆちえのかこい
らゆゆまこらるうのるまきもきるをつぶーて

七月十六夜のこと
きかれふさいかる
ぬといいたちろ画工
の目さをを

四左の上右 ゆうえあけそ且
まちはやうかのからてこれ
烈女ゆうるちまゝーの石の五色
るるもそのそとちふあひゆさるとあ
なゝーの五のとゆそそのそれの五のう
るるもむうーとうう今ふらうるそ
ちうともかるこるるるかのの月と五さゞふ
きらまとるさんえふりやいうんまうるふ
今又ものつふ五さうのゆのうとらい夜るく

さうぐあろうをあ〜ちゆるとうこうとうこうきう
まくまうふおるくふてるるそけれいのの
やうしうくもちうまうまうのとふたうそ
のうまとこうるあゆをうそ小ぐをえうこと
うちーかへんとられはあこうられけけうの
でくきえうせそかちに見えもるうふけう
見こうるのちの又さうふ目ふてあるうのもうく
秋の夜ゝうるくまけーゆゝゆうゆまあく
まうふかう来てその夜のうまま
たちくうるけるのの
ともうまーめそ
くえのこのうい
さんあうさまそ
のうあれ 四左

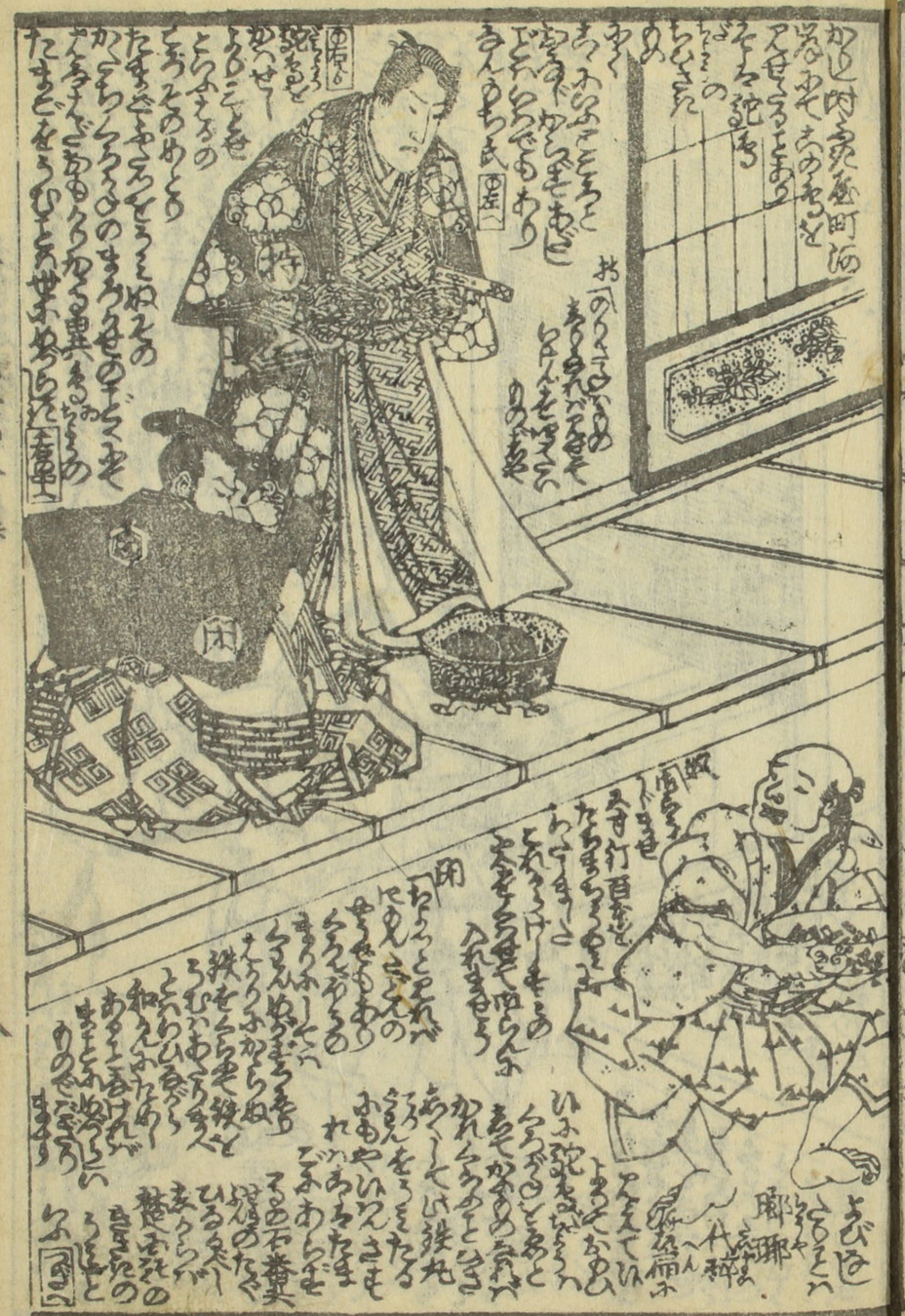


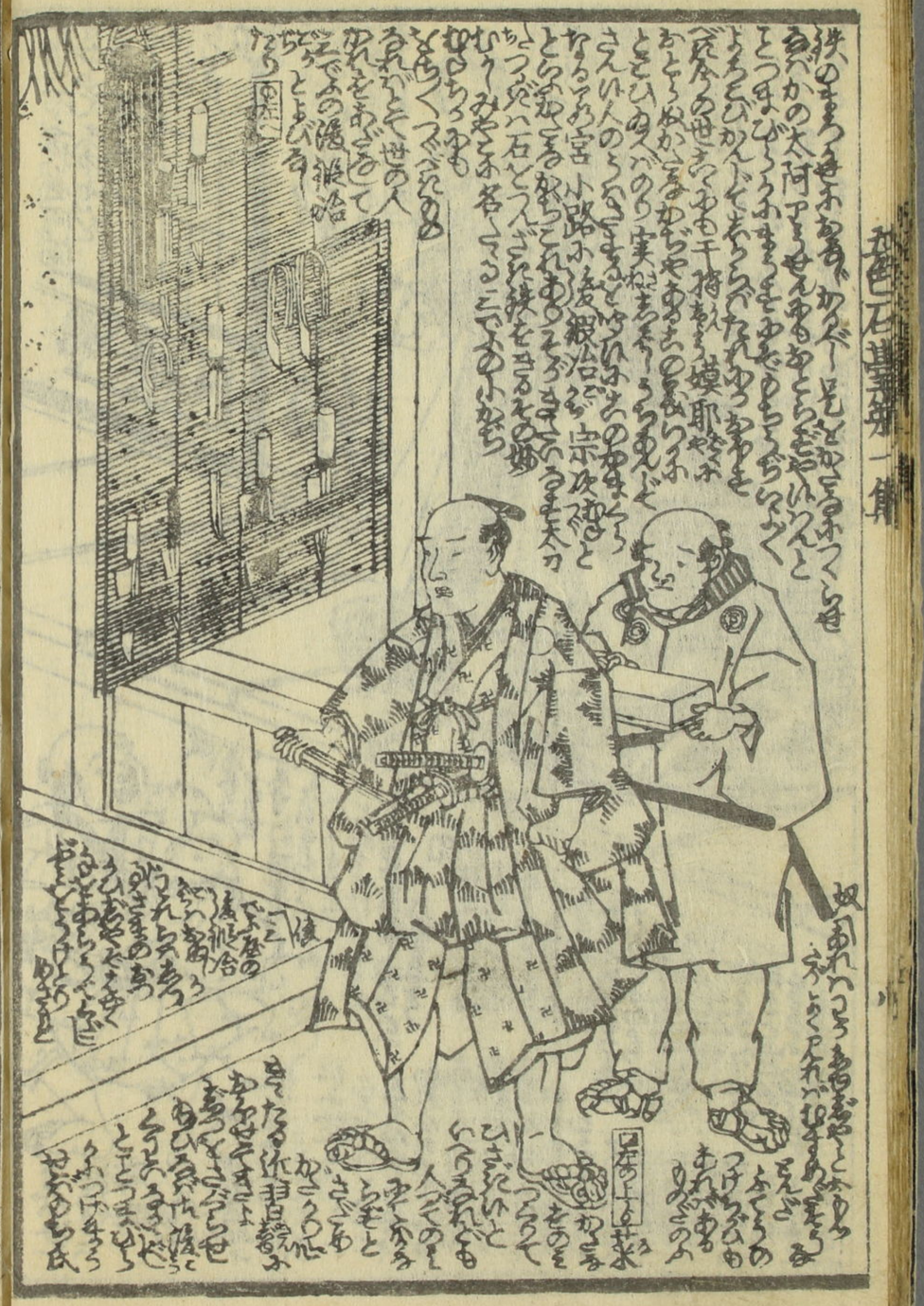
び 光明遍照十方世界
念佛衆生摂取不捨

五色塚

四右の上 なのゆう
あれいつぢの
日営中後のふ
必仕熱まて
のと氏ゆゝふ
世のうちえを
ゆきうくと 四右の下

あくられ出ちとそのもふるくるある
べくくまいくぐ名冒ゆいうちまきふ
あるゆそれ名ゆ氏ゆふまくこうえるそけれいのの
世の中ちもうちうとうるうとうるくやを
らふをきまうはうんとうるうとうるくやを
まうしけるそのとえ者二ぢの
執るまうるるけるる高まうまう
えの必のうあくむあんまくふあり
つらくまの義をうちゆてあと
氏ゆふまうまこゆう今あうあれの
ぐえ上い世のうつぶんふよ見うのと
ゆでさうるとのいべえれ
あんつゆとうけまいうこう
かとふまうるゆうゆうこまよ
あうとたでーはいうゆゆと
たべかるとうるもるく
まうちゆーうべのと氏
まくくうるづえて
えの義をゆうーあふ
ゆゆゆうえのあふ
ゆ見とうこあ人まくふ
ちのゆえてつうのゆとあつゆまう
とまうべふこうるうあべどもあゆ
とのうとゆをけ見べさえうあ世のうう
ぶんい人まうのうのうらうとうりいう
きううひつるあれべてそさは つぎ





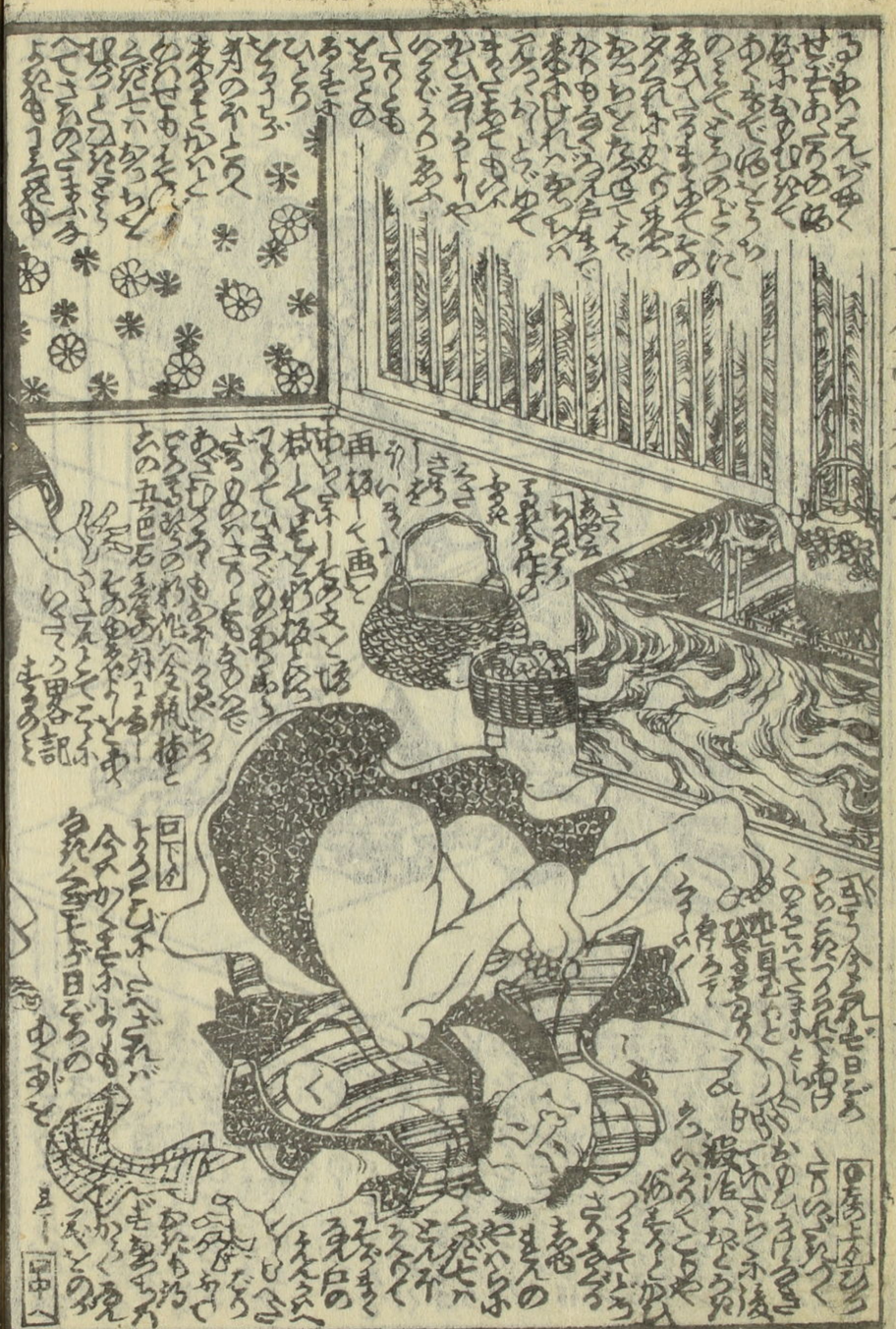
図左の上人 後飛治八郎

図左の中人 鉄の弥九郎

図左の中人

図左の上人

後
遅



馬琴作

女郎蜘蛛

五色石臺

全四冊

豐國画

壹集三

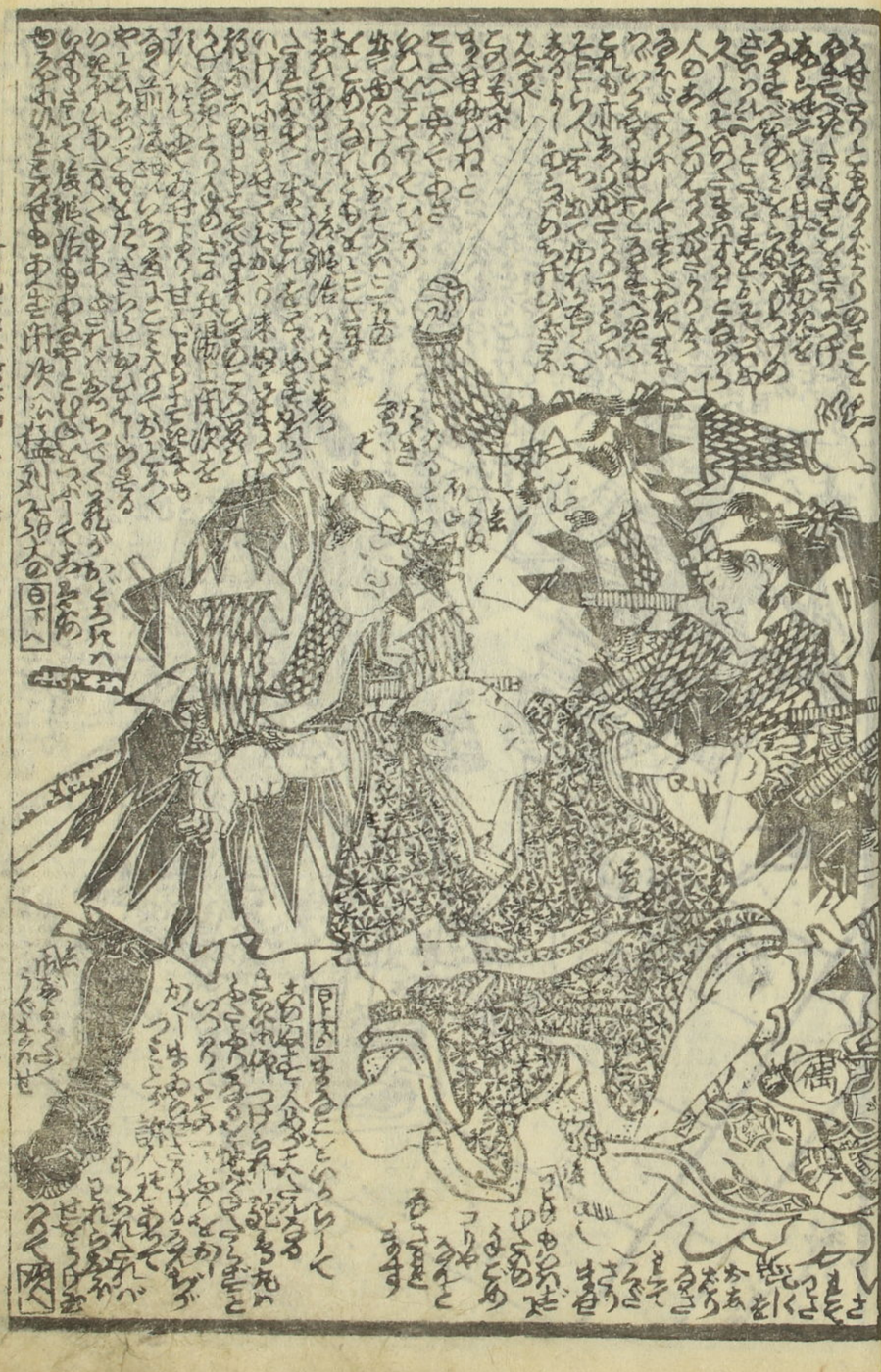
甘泉堂板

女郎花五色石臺初編
曲亭馬琴作
下帙上
下帙下
弘化四丁未春

乎民南
信之
五色
石臺

当要化
豊國画

甘泉堂梓

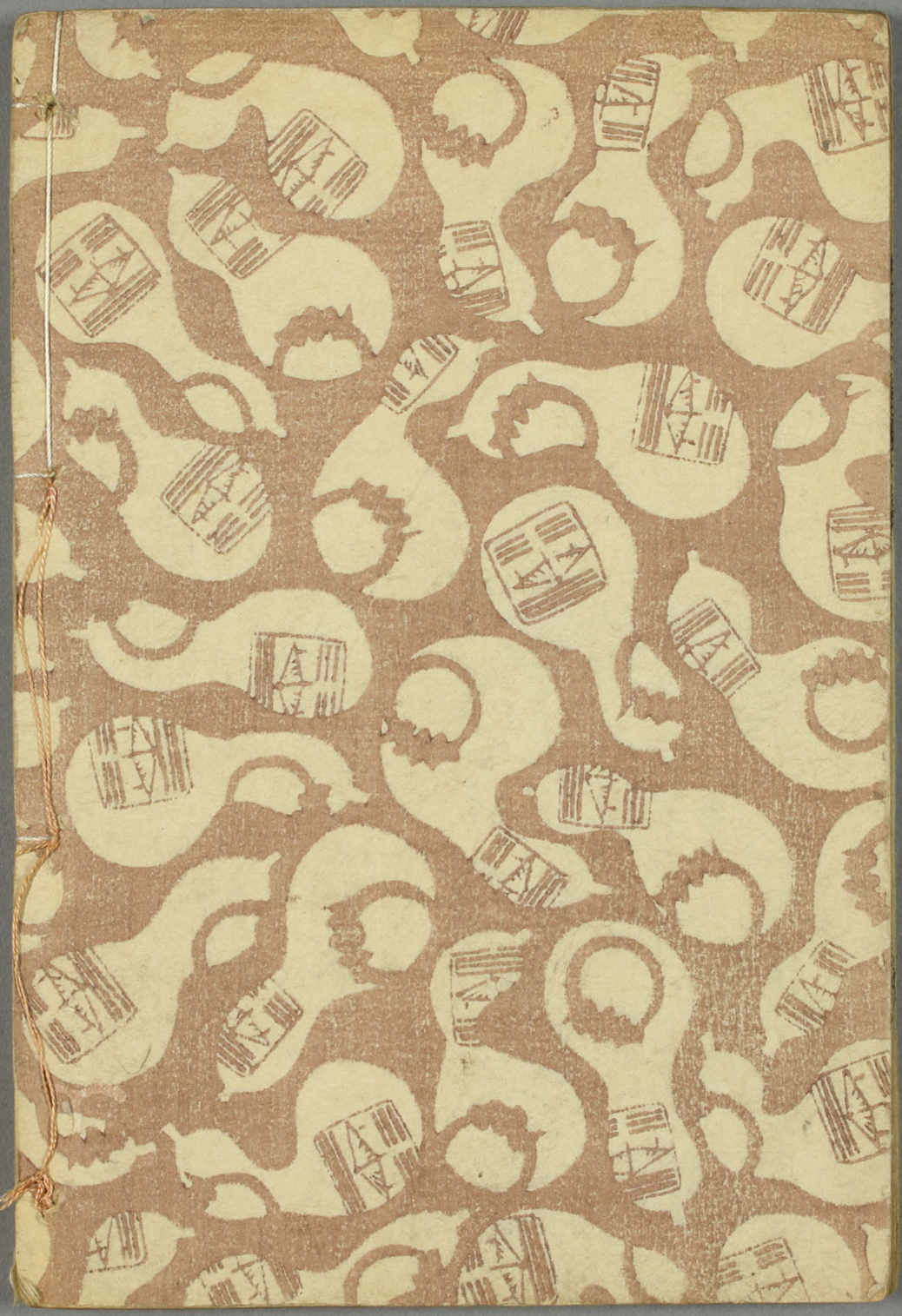


偶

そばうどん

新編金瓶梅十集　曲亭馬琴作　一陽齋豐國画

女郎花五色石臺　初編　曲亭馬琴作　四冊　一陽齋豐國画

児雷也豪傑譚七篇　美圖垣笑顔作　一陽齋豐國画

菊花壇養種　初篇全一冊